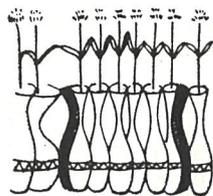


米田庄太郎研究を

始めるに当たって

中村

馨



U.M.

今般、私は光栄にもラーネッド氏奨学金を受け、かねがね意図していた米田庄太郎先生
の思想と業績を部落問題とのかかわりに
おいて研究する機会を得た。米田先生は私の知
りでは、職業として学問を選びかつその深
奥を究めることを得た最初の未開放部落出
身者であったらう。私は中学時代に既に、部
落出身のすぐれた学者が京大に職を得たに
もかわらず、あらゆる差別と闘いながら教授
にまで達したが、根強い差別のためになぜか
に数年にして退職せざるを得なかったとの話
を、市井の仏教学徒を自称する伯父からよく

聞かされた。しかし、その教授の名を米田庄
太郎といい、社会学を専攻する学究であるこ
とを知ったのは、教職についてすでに久しく
私自身が同和教育運動に及ばずながらも力を
注ぎ始めてからのことである。住井すえさん
の長編小説「橋のない川」の第四巻の始めの
方で米田先生の苦痛にみちた闘いが紹介され
たとき、私は始めて先生が奈良県の出身であ
り、水平社以前の孤独な闘士であることも知
り得たのである。

八年前に同志社高校より転勤のお話があっ
たとき、まず念頭に浮かんだのは米田先生に

最初に学問を職業とする場を提供したのが同
志社普通学校であったという事実である。明
治三十五年に欧米留学を終えて帰国した先生
に同志社はしかるべき活動の機会を与え、こ
れが後に先生が社会学、宗教学などの分野で
大きく飛躍する原動力となった勇氣と自信を
培う場ともなるのである。当時は藤村の「破
戒」の時代でもあり、露骨な差別がまかり通っ
ていた。もちろん、部落民自身による解放運動
が自覚的・組織的にとりくまれる全国水平社
創立までには、更に約二十年の歴史の経過が
必要であった。この時点での米田庄太郎先生

の活動は、先生自身の力量によることもさることながら、同時に、当時の同志社の良識と卓見を示すものと言っても過言ではないだろう。先生が明治四十年に社会学講座講師として京大に移って以来の歩みには、その輝かしい研究業績のかけに常に暗い差別の反面がつきまとうの⁽³⁾に対して、同志社時代のエピソードには私の知る限りでは差別の話題はほとんど見当たらない。私が奈良女子大付属高校より同志社高校への転勤をお受けすることにした一つの動機は、米田庄太郎先生の歩みをより詳細に調べ、水平社前史ともいべきもの



米田庄太郎

を、米田庄太郎という一学究の歩みを通して研究したいという抱負によるものであった。

しかし、現実に京都の私学に入ってみると、事情はこの抱負を具体化させるほどには簡単ではなかった。転勤当時、京都の私学には未解放部落高校生⁽⁴⁾の七割が通学しているにもかかわらず、同和教育研究会すら存在していなかった。過去の研究よりもまず現在直面する問題の解決、否、問題の提起こそが重要であった。私には私立中高協会や組合にもよびかけ、あらゆる機会に私学における同和教育の必要性を強調して、同和教育を私学の中に正しく定着させるための前提を作るといきわめて具体的な課題があった。また、部落の生徒も含めて、いわゆる三無主義におちいりやすい多くの高校生に当然の教育自覚をなげかけるための生活指導の実践も必要であった。更に何よりも私自身の本職である化学教育について、国立大付属とは違い教育研究面ではかなり遅れている私立高校での、さまざまの実践研究を試みる——これは解放のための学力の育成という同和教育の課題そのものにもつながるが——という課題もあった。

これらの課題が過去八年のとりくみの中でかなりの成果をあげたという訳ではない。むしろ、部落解放運動の多様な動きや私学の高授業料の傾向もあって、私自身とすれば前途を見失い、適確な指針を得にくくなりつつある昨今である。それだけに、この時点でラード氏奨学金によって米田庄太郎先生の足跡を研究し得ることは大きなよるこびである。水平社以前に戻って解放運動の原点を私なりに探ってみたい。こんな意欲が、ラード氏奨学金受給という具体的な契機を得て一度失いかけた勇気を回復させてくれたことを感謝する次第である。

和田洋一先生の近著「新島襄」は文久三年の伊藤俊輔ら五名の青年の密出国の事情からその記述が始まるが、私がこの夏に「親和力と質量作用概念の発展について」と題する化学史関係の小論をまとめたときに、特に強い関心をもったのも彼ら五名の密出国のエピソードであった。彼らは今日なお横浜で営業をつづけるジャーデン・マジンソン商会の手引きで密出国に成功するのであるが、ロンドンにあって彼らの生活の世話から見学研修のあつ

せんに至るまで細かく面倒をみるのは、意外にも化学者アレキサンダー・ウィリアムソンであった。この間の事情を私はティルデンの「Famous Chemists」や山岡望「ギーゼンの化学教室」、あるいは大仏次郎・司馬遼太郎の小説・評論や田中実の著作などを読みあき⁽⁴⁾つて先述の小論の一部にまとめたのである。

ウィリアムソンは、後のケクレの原子価論の前提をなす水型説の提唱者として化学史上に大きな役割を演じるのであるが、先述の小論のテーマに即していえば、彼が一八五〇年の論文において「化学変化の記述に時間・空間概念を適確に位置づける」ことの重要性を指適したことがあげられるべきである。私の関心は彼の「時間・空間の重視」がいかなる過程を経て生まれてくるか、また、それは伊藤俊輔らへの助力に端的にみられるような、新しい社会の再構成への意欲と何らかの内的な関連をもつのか否かに向けられる。ウィリアムソンの助力が伊藤ら五名だけにとどまらず、維新前後にわたって三〇名あまりの日本青年が彼の世話を受け、その中には森有礼・桜井錠二・杉浦重剛など維新後に各界で活躍する人たちが含まれることを知るに及んで、

関心はいっそう強くなる。そして、ウィリアムソンの思想構成が最初の留学先であるハイデルベルグやギーゼンよりも、むしろ後に訪れるパリにこそ大きくかわるといふ事実を知る。そして、その中心にオーギュスト・コントの実証哲学講義があった。

コントの実証哲学は古在由重「哲学史」ではフランス革命直後の反動ブルジョワ哲学の典型として手きびしい位置づけを受けており、本田喜代治「コント研究」にも同じような記述がある。しかし、一方では飛沢謙一や清水幾太郎のように社会学創設者としてのコントを高く評価する学者もいる。また、昭和十六年刊行の「科学史研究創刊号」の巻頭を飾る桑木論文は科学史研究を正しく科学として位置づけた最初の思想家としてコントの名をあげている。更に、ウィリアムソンやファントホッフのように、コントの思想を直接間接に研究の上に反映させたという化学者の自伝や評論が多数存在する。このように整理すると、コントこそはコンディヤックよりマッハ・オストワルドに⁽⁵⁾至る思想の流れを媒介する上で重要な役割を演じていることがわかるのである。逆説的に言うならば、このような

流れの中でこそ、そのアンチテーゼとして弁証法的唯物論は自己を確立し得たとも考えられる。十九世紀末のエネルギーとアトミックの激烈ではあるが雄大なロマンをえがく論争の中にも、コントの思想が大きくかわっている。オストワルドがコントの実証哲学講義第三部を自ら愛情をこめて独訳したのも当然といべきであろう。

今、私の机上には米田庄太郎先生の著作「文化と社会運動と宗教」がある。大正十二年に中外出版より発行されたものであり、クラーク記念館で借り出したものである。同志社には先生の著作はこの書も含めて僅かに三冊を数えるのみであるのはいささか残念な気がする。ともあれ、この書にみるかぎりコントの影響が歴然としている。労働者運動に対する知識人・宗教人の役割などコントが実証社会学で展開する論旨に非常に近いものがある。先生は四年のコロンビア大学留学の後に二年近くパリに学び、社会学・統計学などを深めるのであるが、この間にコントの社会学組織論に接したことは充分に推定できることである。もっとも先生のパリ滞在はコント死

後半世紀もあとのことであり、ウィリアムソンのように直接コントの講義を受けたという訳ではない。この間の事情を明らかにすることが今回の研究の一つの側面でもある。

かねてより私は同和教育運動を進めるためには高校化学の教師としても一流になりたいと念じ、その方向をめざして努力してきたつもりである。しかし、卒直に言って同和教育と化学教育は基礎学力の保証という車軸の両輪を構成するものではあっても、やっぱり二つの別個の輪と輪であるという感をもつことが多かった。今春以来、同和教育の一環として米田庄太郎先生論文の学習を始める一方、高校化学での新しい教材「反応速度と化学平衡」の教材観を深める中で、私はオーギュスト・コントという歴史的な面での共通の軸を見出したのである。米田庄太郎研究は私のライフ・ワークとする二つの課題を統一的に把握するための必然的な結節点でもあろう。

註

——一九七三年十二月十八日——

(1) 米田先生の簡単な略伝としては、木村京太郎「部落の生んだ奈良県の誇り、米田庄太郎博士を偲ぶ」(「部落」昭二八・四月

号)がある。また、最近では紹介記事「米田教授のこと——大学の差別の中で」(「部落解放」昭四七・三月号)がある。

(2) 先生は明治十九年四月県立郡山中学校に入学したが、差別のために翌年私立奈良英学校に転学し、宣教師I・ブーマン氏の影響を受ける。氏の助力によって、同校卒業後にニューヨークに次いでパリに留学する。

(3) 京大時代の差別については、桑原武夫「人間の戦い」(「部落問題」昭和二五・四月号)に詳しい記述がある。なお、その一部が高橋和己「わが解体」(昭四六)の冒頭に引用され、現代の大学問題についての高橋氏自身のコメントが展開されている。

(4) この小論は京都府私学研究論集第十二号に収録されている。

(5) 米田先生の主著ともいえるべき「現代社会問題の社会学的考察」(大正十年)では、オストワルドのエネルギーを「思维経済の最も徹底的に展開したもの」として次のように述べている。

「而して彼の考うる処によれば、一切の人間の行動の内容は自然のエネルギーを

獲得して之を特殊なる人間的目的に転換することに於いて成立する。……国家は共同目的の遂行のために成立する、その成員のエネルギーの組織的統一である。法律はエネルギー消耗の最少量を以て、相反対する二つの意志行動の均衡をはかるものである。」

米田先生が弁証法的唯物論にも学びながら主として実証主義哲学の方向を歩もうとされたことが推定できる。

(6) 京大文学部「米田文庫」にある先生の著作には、カント・リッケルトやヴァインデルバントなどの訳本を除けば、必ずコントの主張が引用されているといっても過言ではない。(高等学校教諭・理科)

(七四年九月追記) 去る八月末、出張先で米田先生の令息(四男・現六二歳)にお会いして、若王寺山にある米田姓の三つの墓碑が先生のお子達のものであることが確認できた。このうち、「米田之墓」とだけ記す御長男の墓は同志社墓地内にあるので常に清掃はされているが、他の二つは無縁仏の状態に近い。また、先生御自身の遺骨は今なお京都市内某教会の地下に置かれたままである。